



「真実の神」

申命記 5・1-10（要約） 説教者 原田憲夫

「聞け、イスラエルよ。」とのモーセのイスラエルの人々への呼びかけは、一昔前、父祖たちに語られた「掟と定め」ではありませんでしたか・・・現代の私たちには遠い古い時代の話では・・・否！ 今朝は「真実の神」について語られるみことばに耳を傾けましょう。

【1】真実の神、主が—今日の私たち一人ひとりと、顔と顔を合わせて—（1-6）

「約束の地」を前にしたモーセはイスラエルの人々にはっきり伝えます。「主はこの契約を私たちの先祖たちと結ばれたのではなく、今日ここに生きている私たち一人ひとりと結ばれたのである。」（3）

また、「主はあの山で、火の中からあなたがたに顔と顔を合わせて語られた。」（4）とも。¹

▶「契約」を結ぶ目的は、交わした「約束」を実現するためです。しかもこの「契約」は、私たち人間の側に「永遠の祝福」をもたらすものであり、驚くことに、神ご自身がその約束を守る「保護者」となっているのです。

→Ⅱテヘ 2・13「私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。」

▷この真実の神、主の約束は、今日ここにいます私たちに對しても変わりません。

【2】信じ従うのは唯一の神、主のみ—形あるものに惑うな（7-10）

「・・・してはならない」という戒め—禁止命令に、多くの人は厳しいと心を閉ざしがちです。けれどもこれは誤解です。

▶この禁止条項は、祝福を約束した契約相手を間違えるな、という一点にあるからです。

（1）「ほかの神があつてはならない」（7）

「約束の地」には、カナン人が崇拝するバアルをはじめ神々が祀られていました。これらの特徴は人が抱く「欲望」を「形に現している」ことです。→Ⅰヨハネ 2・16「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢。」

（2）「あなたは自分のために偶像を造ってはならない。」（8）

イスラエルの民はシナイ山のふもとで、エジプトから運んで来た「金」を鑄て子牛の像を造り神として祀るという過ちを犯しました。

「牛」は古代世界の人々が思い描く力強い神の象徴でした（珥 39・18）。また、厳しい自然環境の中で豊饒を求める風土に通じていました。

▶注意すべきは、<形あるもの>に神を置き換える事で神ご自身の本質、真実を見失うことです。

▷大切なのは、「約束の保護者」である唯一の神が私たちに對し「あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない。」（7）と語られる真意を謙虚に受け入れる心です。

【勧め】

主イエス・キリストが弟子たちの足を洗われた後、十字架への道を明かされる場面・・・

弟子のピリポが主に問いかけます。「主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」（ヨハ 14・8）

主はその問いに驚きつつ、しかしはっきりと語ります。「・・・わたしを見た人は、父を見たのです。・・・」（ヨハ 14・9）

▷そうです。キリストを信じる人こそが、唯一の神、主を知ることができるのです。²

→ヨハ 14・6「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」

今日、主イエス・キリストに従う道を歩む私たちは、「祝福を約束された真実の神」—契約の相手を間違えてはなりません！

*祈り

*賛美（新聖歌 201 番）

² →ヨハ 1・15「御子は、見えない神のかたち」

△ⅴル 1・3「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完→全な現れであり・・・」

¹ →出エ 33・11「主は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。」